

福山大学 図書館報

Library Announcement,
Fukuyama University

第5号
2007.9

<目次>

本について	片岡俊郎…………… 1
メディアセンターとしての図書館	中橋 雄…………… 2
教員著作寄贈図書	…………… 3
思い出の本	泉 潤慈…………… 4
図書館体験	…………… 5
読み終える楽しみ	安藤詔生…………… 6
もの知り博士&もの知らず博士	山本 覚…………… 7

本について

附属図書館長

経済学部 経済学科教授 片岡俊郎

大学図書館で、学術書を取り扱っていると、学者の著作についてひとつの区分を必要とするような気がする。

私の専門である経済学においても、一口に専門書といって片付けるわけにはいかないからである。20世紀の偉大な経済学者の一人であるJ.M.ケインズ(1883-1946年)は、ケインズの師を追悼する伝記「アルフレッド・マーシャル伝」(1924年)において、トゥリーティス(treatise)、モノグラフ(monograph)、パンフレット(pamphlet)を使ってマーシャルの著作を整理しようとしている。

ケインズの著作は、一般的に9冊であり、他に小冊子6冊があるといわれている。ケインズが自著にトゥリーティスと名付けたのは、『確率論』(1921年)、『貨幣論』(1930年)の2作である。

ケインズを世界的に有名にした著作『平和の経済的帰結』(1919年)は、第1次世界大戦後のパリ講和会議において締結された平和条約に、大蔵省の首席代表として加わりながら、対独賠償要求が不当なものであると指摘するも、無視され、大蔵省首席代表を辞して、平

和条約の不当を世界に訴えたものである。『条約の改正』(1922年)は、その続編である。『説得評論集』(1931年)、『人物評伝』(1933年)は、タイトルにエッセイと冠せられている。

『貨幣改革論』(1923年)には、トラクト(tract)が冠せられているが、トラクトとは、辞書に「(特に宗教上・政治上の)小冊子、パンフレット」とある。

ケインズの上記7著作以外の残りの2著作は、『インドの通貨と金融』(1913年)、彼の代表作といわれる『雇用・利子および貨幣の一般理論』(1936年)である。

ケインズの著作が9冊であり、小冊子が6冊であると、一般的な分類を紹介したが、出版された以上、著作、小冊子として区分するのは不適當であり、ケインズの本として一括して処理すべきであろう。

ケインズの言うトゥリーティスは、大部な体系的専門書、モノグラフは、専門書、それ以外の書は、ケインズの場合、小冊子を含め、啓発書と理解すべきではないかと思う。

ケインズが、マーシャルの著作の分類で示したトゥリーティス、モノグラフ、パンフレットの区分によれば、ケインズの貨幣論の専門書(モノグラフ)は『インド通貨と金融』、『雇用・利子および貨幣の一般理論』の2冊である。

*写真左：『貨幣論』(1930年)、『雇用・利子および貨幣の一般理論』(1936年)

*写真右：『インドの通貨と金融』(1913年)

メディアセンターとしての図書館

人間文化学部

メディア情報文化学科講師 中橋 雄

皆さんは、図書館の役割について考えたことがありますか？日本では、人々の読書離れが問題になって久しく、新聞などでも「本を読みましょ」という広告を目にする機会が多くあります。書籍を読もうと思っても、自分がどのようなジャンルの書籍が好みなのかわからないという人もいるのではないのでしょうか。自分の好みに合うかどうかかわからないけれど新しいジャンルに挑戦したいときや、書店で購入するほどではないかもしれないというときに、図書館の書籍なら気軽に手にして読むことができますね。書籍の閲覧・貸出ができることは、図書館の大きな役割のひとつであるといえます。しかし、それだけではありません。古くから、図書館は、人々が必要とする情報を収集し、整理し、保存するという「知の集積場」であり、知によって人と人を結びつけるメディアセンターとしての役割を担ってきました。

人は1人で生きていくことができません。人は他人に情報を伝達すること、つまりコミュニケーションをはかることで社会的な営みを行います。そのために、人間は言葉を生み出し、文字を発明しました。そして、文字を記憶し、保存するために粘土やパピルス、羊皮、木、亀の甲、布などを用いた時代を経て、紙を発明しました。さらには、グーテンベルグの印刷術の発明により、情報を多くの人に広く伝達することが可能になりました。このような情報伝達技術の進展により、人々がやり取りする情報量は飛躍的に増大しました。まず、情報を記録することで遠くの人に情報伝達できるようになりました。また、時代を越えて後世に情報伝達できるようになりました。さらに、記録された情報は、時代を積み重ねるにつれて人々が社会的・文化的な営みを行うための知恵として蓄積されてきました。図書館は、このような距離や時間の概

念を越えて、情報を収集し、整理し、保存する「知の集積場」として重要な役割を果たしてきたのです。

情報伝達を媒介するもの、情報の乗り物を「メディア」といいます。現代社会において、私たちは、メディアと接触することなしに生活することは不可能です。私たちは、行ったことのない海外の景色や文化を知っています。また、戦国時代の武将の名前や社会背景を知っています。そのような、私たちが「常識」であると考えていることでさえ、メディアから得た情報であることがほとんどです。メディアと呼ばれるものには、様々なものがあります。新聞、雑誌、テレビ、ラジオなど、情報を伝達する社会システムをメディアと呼びます。また、インターネットや携帯電話も、人と人の情報のやり取りを媒介するメディアです。そして、書籍も重要なメディアのひとつです。



最近では、図書館をメディアセンターと呼ぶ大学が増えてきました。情報の形式が多様化している今日では、情報を収集し、整理し、保存する「知の集積場」という役割からすると、書籍のみを扱うだけでは十分とは言えないからです。図書館は、書籍による調査研究の場にとどまらず、映像機器・コンピュータ等さまざまなメディアによる情報提供の場としての役割が求められています。実物、模型、標本、視聴覚資料（例えば、スライド、録音テープ、CD、ビデオ、DVD、マルチメディア）など、様々な形態のメディアを取り扱っていく必要があるといえます。本学の図書館でも、日々、こうしたメディアの集積が進んでおり、メディアセンターとしての機能を備えるようになってきました。

インターネットから得た情報の信憑性を確認するために書籍を活用することは重要です。

逆に、書籍で得た情報をもとに、幅広くインターネット上の情報を収集して知の探求をしていくこともできます。多様なメディアの形式は、相互に補完する関係にあるのです。図書館には、普通の書店には置いていない様々な省庁や研究機関から出版された統計データや白書も所蔵されています。私たちは、普段、テレビやインターネット、新聞などで、これらの資料から得た

データを分析したニュースや記事を目にしています。これから社会に出て活躍する皆さんには、これらのニュースや記事の元である統計データや白書を読み解く能力も身につけてほしいと思います。そして、得られた情報を自ら再構成して、表現・発信し、豊かな社会を形成できる力を身につけるために、メディアセンターとしての図書館を活用して欲しいと思います。

図書館に入って左手にまっすぐ進んでいくと、学習図書室があります。

ここには、最新の統計資料や、白書があり、書庫にはそれらのバックナンバーも保存されています。ぜひ活用してくださいね。

教員著作寄贈図書 (2006年度)

【人間文化学部】

○篠田昭夫教授

チャールズ・ディケンズ

『人生の戦い：一つの愛の物語』

(篠田昭夫訳、成美堂、1990年)【933.6/D】

『チャールズ・ディケンズとクリスマス物

の作品群』(溪水社、1994年)【930.268/S】

『魂の彷徨：ディケンズ文学の一面』

(溪水社、1998年)【930.268/S】

○青野篤子教授

『フェミニスト心理学をめざして

：日本心理学会シンポジウムの成果と課題』

(かがわ出版、2006年)【143.1/A】

【工学部】

○芳賀保夫名誉教授

『住宅建築の不同沈下障害を防ぐ』

(ふくろう出版、2006年)【511.25/H】

『木造住宅リフォーム工事の手引

：トラブルに巻き込まれないために』

(五月書房、2006年)【527/H】

【生命工学部】

○乾靖夫教授

『魚の変態の謎を解く』

(成山堂書店、2006年)【663.8/I】

【薬学部】

○小野行雄教授

『薬学物理化学(第4版)』

(廣川書店、2004年)【431/O】

ご惠贈いただきありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。
図書館では、本学教員著作図書を収集しております。図書を出版された時には是非ご協力ください。よろしく願いいたします。



思い出の本

経済学部 税務会計学科教授 泉 潤 慈

思い出の本をいくつか紹介したい。

経済学では、サムエルソン『サムエルソン経済学(上・下)』(都留重人訳、岩波書店、1968年)がある。

その内容は「第1部、基礎的な経済概念と国民所得」「第2部、国民所得の決定とその変動」「第3部、国民生産物の構成と価格付け」「第4部、所得の分配—生産要素の価格付け」「第5部、国際貿易と国際金融」「第6部、現在の経済問題」となっている。

香川大学理論経済学研究会での勉強会の教材として使用されたと記憶している。毎回レポーターが青焼き(感光紙による)のコピーで報告書を作成していた。

分担して報告をするわけであるが、おかげで、読み進めることができた。経済学の概要が理解できたように思う。

財政学では、井藤半彌『財政学』(千倉書房、1969年)を熟読した(現物は残念ながら、所蔵していない。写真は本学附属図書館所蔵の1980年版である。)。国家公務員試験の受験勉強の参考書として有名な本であったと記憶している。

福山大学に就任する前は、32年間国税庁等に勤務していたが、金子宏『租税法』(弘文堂、1976年)は、税務大学の税務理論研修の際の教材として使用されたと記憶している。租税法を体系的にまとめたもので、当時、初版で本文は490頁であった(現在第12版が発行されている。本文は782頁となっている。)。信義則<信義、誠実(Treu und Glauben); 禁反言(estoppel)>、収入金額と必要経費、同族会社の行為・計算の否認、相続税等に関心を持って勉強したようである。

今は、この本を大学院や学部の演習等で活用している。

なお、税務大学の会計学の研修では、飯野利夫『財務会計論(改訂版)』(同文館、1990年)を教材として勉強した。今も折にふれて活用し



ている。

金子宏『租税法(初版)』の目次は、全5編からなり、下記のとおりである。(第12版では、第2編第2章が「課税要件総論」となっている以外は初版と同じである。)

第1編 租税法序説

第1章 租税の意義

第2章 租税法の意義と特質

第3章 わが国における租税制度の発達

第4章 租税法の基本原則

第5章 租税法の法源と効力

第6章 租税法の解釈と適用

第2編 租税実体法

第1章 序説

第2章 課税要件(総説)

第3章 課税要件各論

第4章 納税義務の成立・承継および消滅

第5章 附帯税

第6章 納税者の債権(還付請求権)

第3編 租税手続法

第1章 序説

第2章 租税確定手続

第3章 租税徴収手続(1)—納付と徴収

第4章 租税徴収手続(2)—滞納処分

第4編 租税争訟法

第1章 総説

第2章 租税不服申立

第3章 租税訴訟

第5編 租税処罰法

第1章 租税罰則法

第2章 租税犯則調査および通告処分

ここで紹介された図書は本学の図書館でも所蔵しています。どうぞ手にとってみてください。

P. サムエルソン『サムエルソン経済学(上)』(都留重人訳、岩波書店、1992年)【331.74/S/上】

P. サムエルソン『サムエルソン経済学(下)』(都留重人訳、岩波書店、1993年)【331.74/S/下】

井藤半彌『財政学』(千倉書房、1980年)【331/I】


金子宏『租税法(第12版)』(弘文堂、2007年)【345.12/K】

飯野利夫『財務会計論(3訂版)』(同文館出版、1993年)【336.9/I】

図書館体験


職場体験学習「チャレンジ・ウィークふくやま」が8月21日から24日まで実施され、福山大学には大成館中学校から5人の明るく元気な中学生が訪れました。

そして、初日の8月21日は附属図書館での職場体験が行われ、図書の受入・登録・整理、閲覧、薬学部分館での業務、蔵書点検等を体験してもらいました。


小川さん  私は今回、図書館の仕事がどんなものか、少し知ることができました。


初め図書館の仕事は、本棚に並べてある本だけを整理すればいいだけなのかな？と思っていました。でも本当は新しい本を置くために一冊ずつ番号をつけたりする仕事があつて地道で大変な仕事なんだということを知ることができました。


作業は一日だけだったけど、とてもよい一日になりました。

小林さん  私はこの職場体験を通して学んだことは、「働く」ことの大変さです。単に、図書館といっても、本の貸出・返却はもちろん、

ハンデイスキャナを使つての蔵書点検や本の整理などたくさんの仕事があることを知りました。ここで学んだことを忘れず、将来の仕事に役立てたいです。

美藤さん  私が一番楽しかったことは、蔵書点検です。ハンデイスキャナで「ピッ」ってしました。でも、エラーもたくさんしました。次に楽しかったのは、薬草園でのアロエベラの植付けです。スコップで、アロエをほりおこすのはたいへんでした。でも、またやってみたいと思いました。

横山さん  私が、図書館に行って、一番感動したことは、動く本棚です。なぜならあんなスゴイ物を今まで見たことがなかったからです。ハイテク！って思いました。そして、労働体験で思ったのが、本が図書館に並ぶまで、こんなにいろいろな作業をしなければいけないんだなあということです。本当に楽しかったです。

渡邊さん  4日間、いろいろな体験をさせてもらいました。図書館での蔵書点検、薬草園での草取りや鉢の植えかえなど、私がしたのはほんの一部だったけど、とてもつかれました。でもとても楽しかったです。仕事の大変さなどたくさんの事を学びました。



読み終える楽しみ

工学部電子・電気工学科教授 安藤 詔生

附属図書館より、図書館や書籍の講読についての文を書くよう依頼を受けた。あまり書物を読む習慣が無い私には、荷の重い課題である。しかし、図書館に行けば、いろいろな分野の書籍があるとの安心感をいただいている一員として、寄稿もやむを得ないと書き始めた。

5月に附属図書館よりいただいた貸出リストによると、利用の少ないと思っていた私も160冊以上の書籍を借りて、活用させていただいている。殆どが専門分野の書籍で、専門外の書籍の少なさが思い知らされる。リストで書籍を分類すると、授業や卒業研究に関する基礎科目の「電気磁気学」関連が40冊と多く、電気応用分野の「モーター」関連が30冊、モーターの「制御技術」関連が20冊、理論計算や実験データ処理のための「数値計算」関連が30冊、その他40冊となっていた。これらの中には、かなり読みこんだ本、章や節の一部を少し読んだだけの本、少ない字数で上手くまとめていると感心させられた本、説明不足だと文句をつけながら対話形式で読んだ本もある。しかし、大半は一寸眺めて積み上げているだけである。学生時代の試験前夜には、分からなくて嫌いでも、繰り返して読む経験をさせていただいた。おかげで、現在は、理解できない書籍についても、投げ出すだけでなく、章や節を眺め、時に文句や対話を楽しむことができるようになった。積み上げの本は、図書館へ返却すべきだが、安心感をいただくために身近に置かせてもらっている。

専門外の書物については、読書の習慣がないので、本屋に立ち寄ることも、県や市の図書館に立ち寄ることもまれである。家内や、今は独立して留守になった娘の書棚の本を時に見る程度である。この半年で、目を通した本について紹介しようと思う。娘の中学生の頃の本と思われる講談社発行の少年少女古典文学館第1巻、橋本治『古事記』を何気なく手に取って

みた。この年齢でと少し抵抗感があったが、神話の部分が物語風に書かれていたので何とか読み終えた。少しもの足りなかったので、本屋によって、『古事記』の書物を眺めてみた。私の手に負える代物ではなくあきらめかけたが、口語調で書かれている文春文庫『口語訳古事記』（三浦佑之訳・注釈）の神代篇と人代篇を帰宅途中の書店で見つけたので購入した。読み始めると、全く記憶から消えていた五柱の神様、少し記憶に残っている「いざなぎ、いざなみ」の伝承、続いて多くの天皇や貴族（連、臣、県主、国造など）の伝承・系図のことが書き連ねられていた。次々に生まれ出る神様や貴族の名前など覚えられず、本来なら、積み上げ放置の本となるところだが、辛抱強くなったもので、文字を眺め続けることができた。これは、「あまてらす、すきのお、おおくにぬし」などの神々、故郷の小社の祭神「すくなひこな」、「やまとたける、推古天皇」と聞き覚えのある名前がでてきたことによるものと思われる。また、年代や地名が分からない、名前が長すぎる、童話のような和やかさが無いなどと、文句を楽しめたことによると思われる。上巻（かみつまき）、中巻（なかつまき）、下巻（しもつまき）の全巻を読み終えたとの達成感は得られなかったが、目を通し終えたとの気分だけは得ることができた。



学生さんには、説明不足で分かりにくいと文句をつけながらも教科書を読み終えることをお勧めする。小説の場合と違って、分からないではすまされないので繰り返して読むことや他の参考書が必要になるかもしれないが。読書には、知識や情感、語彙や表現力を身につけるこ

とやりラックスするなど、目的のある読み方もある。しかし、何気なく目についた本でも、読み終えることで何かを得ることができると思う。今後、漢字、仮名の多い『古事記』を見た時、挑戦したくなるかもしれない。関連あるかどうかは不明だが、講談社発行の吉田敦彦『日本神話の源流』を購入していた。余談だが、3月末

に病院のお世話になった。退院後、娘の書棚にあった文藝春秋発行の奥田英郎『空中ブランコ』を読み、医者と患者の長閑なやりとりより、和やかな気分を味わわせて頂いた。図書館や書店に寄った時、対人関係の多いお医者さんの書かれた小説に手をつけ始めるかもしれない。

もの知り博士&もの知らず博士

生命工学部 生物工学科教授 山本 覚

私が子どもの頃、“もの知り博士”という子ども番組がNHKで放映されていた。不思議なことや分からないことについて、子どもたちが尋ねると、ケベル先生という人形のもの知り博士が何でも教えてくれるという構成であった。当時、小学生であった私も、両親にあれやこれやと尋ねて、何でも教えてもらった記憶がある。大人は何でも知っていると思い込んでいた。

それから40年近い時が流れ、世間の常識も随分変化した。最近のTV番組には驚かされた。何も知らない芸能人をネタにした番組であった。番組は司会者が問題を出し、“もの知らず博士”を自認する芸能人たちが解答をするというクイズ形式で進行していく。問題と解答をいくつか紹介しよう。“鳴かぬなら、鳴くまで待とうホトトギスと形容される武将は誰？”という問題に対する解答が“徳永英明”とか“徳永家康”。“世界で一番面積の小さな国の名前は”という問題に対する解答は“パカチン”とか“デカチン”とか、全く知らない訳ではないらしい珍解答が続出するのである。この番組を見ている人々の多くは笑い転げているだ



ろうが、中には何が面白いのかわからず困惑している人もいるかもしれない。そして、今の小学生は、大人は何も知らないと思うに違いない。

かつては知らないことは恥ずかしいという認識があり、小学生であった私の質問に答えられないとき、私の両親は子どもに知らないと言えず、困ることがよくあったと、言っていた。ところが今では、知らないことが恥ずかしいことではないと思う人が増えつつある。こんな風潮に対して、「今の若者は何も知らない」と愚痴るのは私が年を取った証拠かもしれない。

話は変わるが、私の趣味の一つは読書で、中でも中国の歴史を題材としたものを好んで読んでいる。中国の歴史小説といえば、陳瞬臣氏が数多くの作品を発表している。それらの作品を読んでいると、陳瞬臣氏の博学ぶりに驚かされる。「四面楚歌」「臥薪嘗胆」など4文字熟語でおなじみの言葉の語源となった数々の出来事が解説されているのだ。確かに陳瞬臣氏はもの知り博士である。こんな知識を仕入れると、知ったかぶりで誰かに講釈をしたくなるものだ。その被害者は、ときに私の家族であったり研究室の学生であったりする。ところが、その講釈が講釈になっていない。「中国のどの時代かは忘れたが、某国の王であった何某と別の国の王であった何某が・・・」という具合で、徳永英明や徳永家康と答えた“もの知らず博士”たちとなんら変わらないのである。にもかかわらず、私は中国の歴史の“もの知り博士”のつもりでいるから性質が悪い。中国の歴史は私の専門分野ではない。だから、この程度で許されるという低いレベルで妥協しているのだ。

人には得意分野と不得意分野がある。何でも知っている“もの知り博士”はいない。全く無知の分野だって数多くある。しかし、社会生活を送るために必要な一般常識は誰もが得意とするべき分野であるから一般常識なのだ。企業の多くが採用試験に一般常識試験を導入している。当



然のことだと思う。妥協するレベルを高く設定したいものだ。大切なことは、確かな知識と曖昧な知識を区別することである。曖昧な知識は知識ではない。この区別ができない人を“もの知らず博士”というのかもしれない。バカチンと答えるようなバカチンにならぬよう、日々の努力が大切だ。

フランシス・フォード・コッポラの映画「ゴッドファーザー」(1972年)は、うら社会のうそとうらぎりがテーマである。

主人公がゴッドファーザーといわれる理由は、法に触れるが、確実に儲(もう)かる麻薬を捨て、一般の人々がリスクが多く、手を出せない正規の事業で巨万の富を得、寡黙でうそを控え、相手を信頼することによって、うらぎりを防いだことによる。

大学は、おもての社会、まこと(真理)と信頼で成り立っている。うそとまことの間にある隠し事をなくし、うらぎりと信頼の間にある従順は、大学人、一人一人の人的成長によって、面従腹背とは区別される、個々独立した人間と人間との関係としての信頼にまで高める必要がある。

(K)



福山大学 1号館

2008年1月25日発行

編集・発行 福山大学附属図書館

〒729-0292 広島県福山市学園町1番地三蔵

<http://libexp.fulib.fukuyama-u.ac.jp/>

印刷 三原プリント株式会社

〒723-0041 広島県三原市和田一丁目5-13